
空色をかえて

shokocoa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空色をかえて

【Zコード】

N4803Y

【作者名】

shokococo

【あらすじ】

ひとつそりとファンタジー小説を読む事が趣味の鈴村美穂（主人公）が、同じ趣味を持っているらしい同じ学年の男子生徒から懐かれてしまう。しかも、その彼は端正な顔立ちで有名人なのだ。・・・そして、主人公の平穏な日々が少しづつ変わっていく

出来ました

学校は楽しい。
適当に勉強していれば、どう過いようと自由だから。

「鈴村さん、居ます？」

いつものように自分の席で、親友と昼食をとっていると
「スズムラ」という聞き慣れた単語が耳に入ってきた。
自分の弁当箱や筆箱、さらには放り出したままの鉛筆の側面に
鈴村美穂（すずむらみほ）と書かれているのが目に入る。

ありふれた名字なので小さい頃から自分の持ち物には名前を書く癖
がついているのだ。

という訳で、私を含めて5名のスズムラさんがこのクラスには居る
ので
フルネームで呼ばれない限り返事をしない。

だつて、返事をして私じゃなかつた！なんて恥ずかしい思いはした
くないでしょう。

そもそも友達の少ない私は親友の純（ジュン）ちゃん意外とはあま
り喋らない。

だから”私では無い”と結論付けて、食事を続けていると誰かが私
の前で立ち止まる。

「鈴村美穂さん？聞こえてるかな」

弁当箱から視線を少しづつ上へとずらしていくと見た事のある男子生徒が私を見ていた。

落ち着いた金髪で少し青みがかつた目が私を映している。
えーっと、誰ですか貴男。

この綺麗な顔・・・見た事はあるが名前を覚えていない。
微妙に記憶されているのは同学年で、『喋った事のない人』という意味のない情報だ。

「私に用ですか」

思いのほか硬い声で返答してしまった事に、自分でも驚く。
いや、久しぶりに純ちゃん意外と会話するから緊張しているのよ。
頑張れ自分！と励ましながらぐつと顔は彼から反らさずに言葉を待つ。

「うん、用という程ではないけど・・・会いに来ただけだから。」

私の言葉に、困った表情をした彼はボソリと呟く。

「は？」

「またね、お姫様」

さらに意味不明の言葉を残して教室を出て行く。

「ええ？」

何の人、電波でも飛ばしてそうで怖いんですけど・・・
未知なる物体に怯えている私は、クラス中の視線を集めていた。

純ちゃんは面白そうに手を細めて一言。

「どこで引っ掛けたの。」

「記憶にございません。」

ここ一週間を思い出してもあんな人と関わるような、特別に変わったことはしていない。

小首を傾げて私も純ちゃんに尋ねる。

「ところで、あの人は誰ですか」

放課後、クラスメイトの視線を避けて辺り着いた図書室で私は読書に夢中になっている。

登場してくるのは妖精とか魔法使いとかドラゴンとか・・・とにかく現代社会とは大きくかけ離れたファンタジー小説というものがだ。

幼い頃からこの手の本を読みあさり、今もなお熱中しているのだから立派な趣味と言えるだろう。

「あつ、うつ

^{うめ}

ちなみにこの「呻く」ような声は感動したときに勝手に出てくる。

表情筋も連動しているのだが、そんな顔を人に見られるのがいやなので

前髪は頬にかかるくらいの長さで表情を常時隠している。

今に限らず私の前髪は顔を隠している。

だって、教室でも読書するのだから見られたくないじゃないですか。

呻き声はいくらでも聞いてくださっても良いんですけどね。

はふう、ドラゴンが騎士に倒された中盤まで読み終えて

私は前のめりになつていた姿勢を正す。
すると前の席に向かい合うよう人が座つていて、にっこりと笑いかけてくる。

「つつっ！」

驚きに声を上げそになつたが慌てて口を塞ぐ。

お昼にあつたばかりの人物だ。確か・・・

「相模さん？」

私が小さい声で話しかけると彼は目を見開いて、更に笑みを深くする。

相模聰（サガミサトシ）2年3組の王子様。女性に甘く人気があるが彼女はおらず、

彼を狙つている女性が多く存在する。

・・・ファンタジーでいうならドラキュラとか似合いそう。
うん、最後のは個人的な意見だけ。

「鈴村さん、僕の名前知つていたの？」

それが標準の表情なのか、彼の顔にはずっと笑顔が張り付いたままだ。

筋肉つかれないのかな？

「生憎ですが、今日のお昼に貴男の存在を認識したばかりです。」
あなた

考えている事は言葉にせず私は応答する。

知らない人と話す時は、大体ムスッとした口調になるのは仕方ない。不安と緊張と、人見知りなのだから。

とりあえず、お昼にも言つた台詞をもう一度。・・・電波な答えが返つてきたら逃げよう。

「相模さん、何か御用ですか。」

少し低めに声を出す。

こんな地味な女に何の用があるのか。

私は早く、落ち着いた世界に戻りたいのだ。

無駄に端整のとれた美男子が隣に居ては、本に集中したくともできない。

その証拠に、いつもは静かな館内がピンク色のオーラでも纏ついて、

そうな

女生徒でザワツイでいるのだ。

しかも、視線が相模さんに向けられている。

明らかにこの甘くて落ち着かない雰囲気の元凶はこの男だ。

図書館という聖域に、魅了魔チャーム法を使つような魔物はいらないのだ！と心中で叫んでいると、彼の指先が私の本へと向けられる。

「鈴村さんは趣味が合いそつだから友達になりたいんだ。」

はてな？

この人は何を言つているのだろうか。

「僕もね、好きなんだよ。特に冴村つていう作家のファンタジー小説とか」

私は、先ほどまで『あつちいケー！』と思つていたのを一瞬忘れて目の前に座る男子生徒をまじまじと見つめる。

そして、

なんで私がファンタジー小説好きなの知つていて、『あつちいケー！』という恐怖心と私も冴村先生好き！』というのを言つた方が良いのか？ていう困惑と

この人は危険人物なのだろうかという猜疑心と・・・・

「明日も図書室来るよね?」

彼が問いかけた事に気づかず、うつかり頷いてしまう。

「じゃあ、また明日ね。」

そう台詞をのこして図書室を出て行く彼の後ろ姿を私は頭痛のする

思いで見送っていた。

「・・・明日も会うのか・・・。」

苦々しくかみ殺した文句は誰にも聞かれなかつたはずだ。

田舎ごました（後書き）

初めての小説（処女作）で、緊張しています。頑張つてかき終えた
いと思います！

出来しました1

三時限目が終わると唐突に質問された。

「その後は何もなし?」

眉間にシワを寄せて迫つてくる親友に、私は上機嫌に頷いてくる。

あの『お友達』や『また明日ね』発言から3日が過ぎた。
私は”放課後”ではなく”休み時間”を利用して図書室に行つてい
た。

なので王子に会う事なく、いつもの日常生活だ。

少し違うのは、帰宅時間が早くなつたことくらいだが

「静かに読書ができる満足」

嬉しい声で宣言をすると彼女は短く舌打ちをする。

「ちつ！絶対に面白い事になるとと思つたのに

「純ちゃん・・・

私は苦笑しながら目の前の親友をみやる。

これといった特徴はなく、少し低い鼻に少し小さな脣。

切れ長な一重まぶたは冷たい感じはしないが、優しい印象も受けな
い。

岩里純（イワサトジユン）。平均的な日本人顔だ。

ただひとつ印象に残るとしたら、彼女が腹黒い一面があると言つ事。

「だつて、楽しい事には心が躍るでしょ?」

真顔で語る顔に『楽しみの餌になれ』と書いてあるのが見える。

ので出来るだけ重く一撃。

「純ちゃん、一緒に踊らせてあげよつか」

彼女の眉がぴくっと動く。

更に言葉を続ける。

「渡辺先輩と昨日の夜、」

途中で台詞が途切れたのは彼女が私の口を塞いだからだ。

「・・・」「・・・・・」

無言でお互いに圧力をかける。

先に動いたのは彼女だ。

「不毛な戦いはナシ！」など、びっくりした。

私は口を塞いでいる彼女の手をどかして「異議なし」と答えた。たわいもない話をしていると10分の休憩時間が終わる。

変化のない日常は大好きだ。

次は数学か。

このとき、一時間後には非日常になるとは知らずに私は安穏としていた。

「じゃあ、明日は46ページからだ。予習していくよ」と

終了1分前。

数学教師の間延びした声を聞きながら、ノートを閉じて教科書「」と机にします。

この先生授業は、あまり人気がない。

黒板にピッカリと数式を書き込むからだ。

今は5月だが、2年生になつて買った数学のノートは1冊を終え、2冊目に突入していた。

周りを見渡すとまだ写生し終えてない生徒が沢山いた。

皆の頭の上に焦った様子で『お昼休み！』の文字が見えてくる。

学校には大きな駐車場が完備されていて、お昼時間になると弁当屋が立ち並ぶ。

弁当を持つてきていらない者が敷地外に出てサボらないようになると弁当屋が立ち並ぶ。

チャイムが鳴つたら走つて弁当を買いに行く者が多い。

勉学の時間に敷地外に出ようとすると、警備員が止めてくる。

この時点で外のコンビニには行けない。

（ちなみに強行突破しようとした生徒は学生証を提示させられ、担任である教師がついてくる。

もちろん担任は不機嫌極まる。昼食時間を削がれるのだから。）

とこう訳で、うちの学校では「食べて、遊ぶ！」といつ健全な昼食時間が主流だ。

「じゃあ、今日はここまで。」

先生が言つると同時にチャイムが鳴り、お弁当といつ宝を巡る戦いが始まつた。

「熱いですな。」

純ちゃんが感心したようにパチパチと拍手を送る。

「そうだねえ、がんばれ～～～」

私は猛ダッシュで宝を追い求める勇者達に声援を送る。

私と純ちゃんは、毎日お弁当を持ってきているので不参加だ。

「では、いただきますか」

鞄の中のお弁当を取り出しながら前のめりの体制になる。

「鈴村さん」

何だか聞き覚えのある声が・・・といふと、お弁当といつてからこしょひ。

ゆつくりと鞄から田的物を取り出して私は顔を上げた瞬間に小さく悲鳴を上げる。

「ひつー！」

三田、ぶりにみた王子は薄い笑みで私を見下ろしていた。

「久しぶり。図書室に行つても会えないから来たんだけど？」

ブリザード魔法でも使つているのではないかと思うくらい空気が冷えていく。

まつ負けるものか。

「さうですか、でも貴男に会つ約束をした記憶はありませんよ。」

声が震えないようゆつくりと喋る。

「でも僕『また明日』って伝えたよね。」

伝えてきたけどそれが何ですか。

「私は図書室に行くだけ約束しましたよね。」

ぴりぴりとした口調でそう告げると彼は田を細める。

ネコが獲物を捕らえる時一緒に囲氣だ。

怖い！何！？

「『また明日も会つのか』て言つてたよね。」

冷や汗が背中を流れる。

「聞こえて・・・」

あの距離で良く聞こえましたね。
どんな聴覚してるんですか貴男。

「だから会つてくれると思い込んで、放課後の図書館で待つてたん
だけどね。

まさか、休憩時間に会つてるなんて・・・ねえ」

最後は問いかけるように視線を向けてくる。

「うう～、私は手詰まりとなり謝罪する。

「スマミセンネ」

心が籠つてないのがせめてもの反抗だ。

「うん、じゃあ宜しく。」

「えっ？ 何を？」

私は意味がわからないという顔をする。

前髪でわからないと思うが・・・

戸惑っているのは声で把握できたようで彼が当たり前のようにならげ
る。

「喧嘩して、仲直りもしたし。
友人になってくれるでしょう。」

それは遠慮したい。

と言いそうになつたが会話を聞いていたのであるうう生徒の視線が
集まつてゐる事に気がついた。

特に女子の視線が刺さる・・・

「王子を待ちぼうけさせた上に断つもんじゃないでしょうね」

とこの声が聞こえてきたのだ。

純ちゃんは、ニヤニヤしながら傍観を決め込んでいるし・・・
考えるの、面倒くさい。

そう判断した私は溜息を飲み込んで「よろしく」と答えたのだ。

出来ました2

逃げ回った結果、（半強制的に）トモダチになつた相模さんは男女ともに人気がある事を知つた。

「頼む、バスケの助つ人お願いできなき！」

上級生であるう男子生徒から依頼があつたり

「来週から調理部での試食会があるので先輩も来ませんか？」？

下級生から試食をお願いされたりと、目の前の人物は色々な人から声をかけられている。

（命名）王子はその全てを理由を付けて柔らかく断つていく。

が、女子生徒は王子曰うてのお誘いだ、簡単には引き下がらない。

「相模先輩、放課後の1時間だけでも良いんですね。」

「ごめんね。僕もやりたい事があるから。」

「でもつ」

「ごめんね。」

しかし、謝罪の言葉で圧力をかけて遮つてしまつ王子。

彼と知り合つて1週間が経過している。

放課後の図書室で向き合つ形で座つて読書をするのが日常化しだしているが

優しく威圧的に断りを入れる風景も見慣れてきた。

そして、もう話は無いという雰囲気を捉えて女生徒は立ち去る。

一瞬・・・睨まれたのは気のせいだろ？

「読書中に騒がしくなつてごめんね。」

女生徒が完全に退室したのを確認して彼が申し訳なさそうに顔を顰しかめ、

少しくすんだ青い瞳が長いまつげで隠れてしまつ。

「明日からは、こいつの事は無いようになりますから。」

その言葉を直訳すると、『明日からも放課後に図書室で会つ』
とこいつことに気がつくが、逃げても無駄とこいつの事は実証済みなので頷く。

「わうしへてれー。」

ファンタジー小説で一番好きな所は、お姫様がピンチの時に英雄が登場する場面だ。

「あんたみたいな地味女、ただの遊びに決まつてるー。」

「相模先輩を独り占めするのは許せない！」

「ていうか、気持ち悪いし邪魔だしー！」

図書室に向かう途中の出来事だ。

あまり使用されていない様子の資料準備室に連れ込まれ、数分前から罵倒されている。

女生徒二名。

顔を見ると昨日みかけた調理部がいたので、下級生だと断定できる。睨まれたのは気のせいでは無かつたようだ。

鈴村美穂 すずむらみほ ただいま人生初のピンチに陥つております。

落ち着け自分と言い聞かせ、どうしたら良いのか頭を回転させる。

この娘たちは王子に好かれたいんだよね。

じゃあ、私に突っかかるのではなく彼にアピールした方が効率的で
しょう。

なぜ私に抗議しにきたのか、わからない。

「私にあたる時間があれば、相模さんに会いに行けば良いのに。」

思わず発した言葉だ。

次の瞬間、突き飛ばされて体が後ろに倒れる事に恐怖を感じる。幸いにも体に傷ができるような障害物が倒れ込んだ先にはなかつたので、変な怪我もせず、体を打ち付けただけですんだ。頭を打たなくて良かつたと安心したのも束の間。

「しばらく、ここに居なよ。」

リーダーらしき女生徒の「^{つぶや}」に顔を上げると、教室の扉が閉まる。

まさか！

私は慌てて扉を開けようとドアノブに手をかけるが、遅かつた。鍵が掛かっている。

そして遠くに走り去る彼女達の足音。

「閉じ込められた・・・。」

扉はひとつ、外鍵が掛かっていて内側からはあけられない。窓はあるが私の体が通るような幅ではない。

万が一出れたとしても3階なので死んじゃうかもしれない。
自力では出れない。

焦りながらも他に部屋から出る方法を探す。

天井の蛍光灯が目に入る。

そして扉の横にはスイッチ。

そつと押してみると、明かりがつく。

・・・・夜になつて、警備員が見つけてくれるまでの辛抱だな。

結論が出て、冷静になつた私はいそいそと本を取り出す。
部屋の奥には使われなくなつたソファが何個か置かれているので腰
掛ける。

暗くなつても明かりは確保できているし、警備員の巡回も何時間か
後だう。

背表紙のざらりとした独特の感覚を楽しむように、撫でる。

「ふふふ。」

一人の空間で読書が出来るのが嬉しくて笑いが出てくる。
先客が居ると知るまでは・・・

「ねえ、何がおかしいの。」

背後から声をかけられて、驚きのあまり背筋が伸び変な叫び声を上
げてしまつ。

「ひあつー。」

「ふうん。可愛い声。」

声の主を見るために振り返ると、^{くつろ}氣怠げに少年が真後ろで寛いでいた。

人が居るとは思つていなかつたので私は驚きで動けずに居る。すると、少年が手を伸ばし私の制服を引っ張る。

予想していない行動に体が反応しきれず彼に寄りかかる体勢になつてしまつた。

「温かい。」

耳元に低い声で囁かれて緩く抱きしめてくる。

呆然としているとゆつくりと首筋に顔が息が・・・うわ！――！

「気持ちわる」

自分の置かれている状況を把握した途端に背筋に悪寒が走り、思い切り叫ぶ。

腕の中から逃れようともがくが微動だにしない。

「うわあ、傷つく」

見知らぬ少年は棒読みのままゆつくりと体を離した。

どうやら解放してくれるようだ。

私は急いで体を離そうとしたが、腕をつかまれ距離を取る事に失敗する。

「そんなに慌てなくとも、まだ何もしてないのに。」

「何もしなくていいです！」

「ねえ、前髪邪魔じやないの？」

彼が私の顔を覆う前髪をわけようと手を伸ばしてくる。

仰け反るようになに避けると鍵が掛かっていたはずの扉が勢いよく開くのが見えた。

そして、扉を開けた人物が私たちを視界に捉えると眼を細める。

「・・・その手、どこでもらえないかな。」

躊躇する事無く私を少年から引きはがす王子。

ここに閉じ込められた原因は彼の所為だという事は忘れていないが、見知らぬ少年から私を救い出す相模さんが救世主に見える。

出会いました2（後書き）

なんだか、話の収集がつかなくなつてきました・・・?
最後まで書き切るのを目標にがんばります！

出来ました3

手を握られたまま、資料室から疋はやはに遠ざかる。

「えーっと相模さん？ もう平気だから。」

1階へと続く階段の踊り場にさしかかったときに恥ずかしさのあまり呟く。

手を離してほしい。

放課後で生徒が少ないとほいえ、手を繋いで歩いているのは悪目立ちする。

早く距離を取りたいと私が考へているのがわかつたのか、握りしめられていた手が解かれる。

思つていたより強く握りしめられていたようだ、私の手はほんの少し痺れています。

手を動かして痺れを紛らわせていると、硬い声が耳に入る。

「鈴村さん、あの子達には注意しといたから。」

「・・・え？」

理解するのが少し遅れたが、私を閉じ込めた娘たちのことを命じてかいく。

どうやら彼女達は私を放置した後に彼に会いに行つたようだ。

そこで、どうやって私の事がバレたのかは気になるが・・・。

まずは、助けてくれたことと彼女達に注意してくれた彼にお礼を言わなければ。

「ありがと。」

私が感謝の気持ちを告げると、彼は困った様子で小さく呟く。

「・・・本当にごめん。」

責任を感じている彼にしょんぼりと垂れている耳と尻尾が見えたきがした私は笑ってしまった。

「別に良いのに。ふふ。」

そして、一気に震えがくる。

資料室での出来事が脳裏に焼き付いている。

知らない男性^{ひと}に抱きしめられて

「怖かった」

そう、平常心を保っていても怖かった。閉じ込められた密室で、知らない人間に好きなようにされるのがとても怖かったのだ。

涙が出そうになり、慌てて目元をこする。泣いてしまったら相模さんが困るだろうし、人様に見せられる泣き顔じゃないからね。

私は笑顔で彼と向き合う。

「うん、これくらい大丈夫です！」

「……これじゃ同じだ。」

同じって？

私の頬に彼は手を伸ばす。

指先はとても冷たく、そこから私の体温を奪っていくようだ。彼はそこに私が存在するの確かめるように触れてくる。

「鈴村さんは……もつと警戒心を持ったほうが良いよ。」

哀しげな瞳を向けられて、私の記憶に何かがひつかかる。

こんな瞳を以前にも見た事がある。

でも、どこで見たのかも誰が向けた瞳だったのかも・・・霧がかか
つたよつて思い出せない。

「今日はもう遅いから、駅まで送るね。」

頬に触れていた手が離れ、王子は笑う。

先ほどまでの暗い気配は、どこにも無かった。

誰もいない自宅に辿り着いた私は

いつものように着替えを取りお風呂場へとむかう。
温めの水を湯船にためながら、シャワーで汗を流す。

さつぱりした所で、自分の太ももに視線を落とす。
右足の付け根から膝へ薄らと傷が入っている。

小さい頃に出来た傷らしいが、どうして出来たのが覚えていない。
霧がかかったように思い出せない。

「王子の瞳を見た時と一緒に。」

もしかして、幼い頃にあった事があるのだろうか。
明日にでも聞いてみよう。

そして今日は、眠る前にあの本を読もう。

私が大好きな『月と狼』。

出でていました③（後書き）

伏線を消費しようとしたら増えた（汗）
次話では必ず1つ以上は謎を解きます。

出合いました4

”月と狼”

森の奥に一匹の狼が暮らしていました。

お月様は、狼のことをいつも見守っていました。

何故なら、狼の毛は真っ白で

ふわふわでしたが夜になるとお月様の光に包まれて
お月様と同じ、優しい銀色になるのです。

太陽の光を受けてばかりのお月様は、

同じ色に染まつてくれる狼が大好きで見守っていました。

狼は、とても優しい心の持ち主でした。

しかし

大きな口に鋭い目。

恐ろしい顔をしていたので森の皆から怖がられていました。

狼には家族もトモダチもいません。
でも狼は寂しくありませんでした。

狼は銀色に染まつた姿を
森の湖で見るたびに、お月様と一緒にいるよつで
独りじやないと思えたのです。

森の湖で

狼は、お月様に毎日話しかけました。

お月様は毎日、優しい光で狼を照らし出しました。
お互いに穏やかな毎日幸せを感じていました。

あるとき終わりが来ます。

森で狩りをしていた王様が偶然、

月の光を受けた狼を見かけてしまいました。

城に帰つた王様は召使い達に言いました。

”森に銀色に輝く狼がいる。私はあの美しい毛皮が欲しい”
さらに言葉を重ねました。

”美しい毛皮を持ってきた者には、褒美をやる”

王様の命令で國中の男達が動き出したのです。

「純じゅんは、居ゐるか。」

昼食を食べ終えると、後ろから声をかけられる。
ああ、いつ見ても切れ長の一重が親友とそつくり。

「さつき、渡辺先輩のところに行くつて出て行きましたよ。途中で会わなかつたですか。」

声をかけてきたのは、無表情な渡辺先輩だ。

親友とは遠い親戚らしい。

とても仲が良いようで、2人でいるのを頻繁に見かける。

「いや・・・小さいから見逃したか。」

180?はあるだろう先輩は、本氣でそう思つてゐるらしく溜息をついた。

そして、いつの間にいたのか先輩の後ろに親友が仁王立ちしている。

「孝道、誰が小さいって? あんたが『テカ過ぎるだけでしょう!』

「そうか?すまん。」

なぜ怒つているのかわからないといつ顔をされた身長150?の親友は呆れたようだ。

「人が気にしている身長を言つからよ。」

「・・・すまん。」

彼女の言い分を理解した先輩は気まずそうに謝る。

「だが、純は可愛いから大丈夫だ。」

どうやらフォローしているようだが、その言葉に親友は真っ赤になる。

「くつ!むかつく!」

小さく文句を言つが、反撃はしないらしい。

そして、私はふと思い出した。

「そういえば、一人は何か用事があつたんじゃないの。」

純ちゃんは、はつと顔を上げて叫ぶ。

「ああ！生徒会！」

今度は先輩が呆れたように歩行を促す。

「忘れてたのか？行くぞ。」

「何よ。その手は・・・

「俺の彼女だと周りに牽制けんせいをする。」

「はあ！？」

ふーん

いつの間に付き合ひだしたのかなあ。

手を握られ、ずるずると引き摺られる親友をじと目で見送る。が、幸せそうで何よりだ。

比べて

私は読書している時が幸せだと思っていたが
最近、落ち着かない。

原因はわかっている。相楽さんが来ないからだ。

あの日から彼は教室にも図書室にも現れなくなっていた。

関わりたくない時には居るのに・・・と思つても仕方ない。

「毎日来てたのに、どうしたんだろ。」

ぽつりと呟いてしまう。

そして、彼が居なくて寂しがっているように聞こえる独り言に私は
恥ずかしくなる。

私の胸中の霧は未だに晴れていない。

質問しようとしていたら会わなくなつたので、余計気になつていて
始末だ。

・・・仕方ない、彼を訪ねに行こう。

教室の時計を見ると休憩時間が残り15分だと確認する。

15分なら話も出来るだろ。」

私は重い足取りで、二つ隣の教室へと向かう。

彼の教室に、すぐにつく。

「すみません、相模さんはいらっしゃいますか。」

私は、教室に入ろうとしていた女生徒に話しかけた。

「相模君？ 教室には居ないけど・・・少し待つてて。」
彼女は面倒という様子を出さずに、走り出した。

「あ！ 待つ・・・」

待つてください。という声は届かないだろ。」
彼女は廊下の彼方にいた。

他人の教室の前で居心地悪くしていると親切な女生徒が戻ってくる。
彼女の後ろには、相模さんがついてきていた。
所要時間にして1分半くらい。

”少し待つて”の言葉は本当だつた。

「ありがとうございます。」

私がお辞儀をすると女生徒は”どういたしまして”と返して教室へ
と入つて行つた。

目の前に立つてゐる相模さんへ視線を移す。

今、彼の顔にはどんな感情も映つていなが瞳には私だけがいる。

「聞きたい事があります。」

このとき、少しだけ声が震えているのは
久しぶりに見た彼の瞳に捕らわれたからなのか自分でもよくわから
ない。

「幼い頃に私と会っていますか。」

ゆっくりとはつきりと聞こえるように質問する。

「それは・・・」

少し掠れた声が漏れてきたが、

私は目の前的人物がばぐらかさないようにな
しつかりと目を見つめてもう一度、訊く。

「私と会っていますか。」

すると、彼はぐっと眉根を寄せて話だす。

「父も母も黒髪に黒目だけど、僕の金髪と青い目は生まれつきなん
だ。父方の祖父が外国人で、隔世遺伝したみたいなんだ。

両親は可愛がってくれたんだけど、幼い頃の僕にしてみれば、
この容姿は劣等感以外の何モノでもなかつた。」

笑顔も消えて、彼は苦しさを耐えきれないように顔を歪める。
しかし、声は濁らず言い切る。

「だから初めて君に会つた時、俺は救われたんだ。
そして、君を傷つけてしまつた。」

「・・・」

私は思わず自身の太ももへと手を動かす。

その動きに気づいた彼は更に眉間に皺を寄せて断言する。

「俺のせいで出来た傷だ。」

その言葉を良い終えると、沈黙の時間が流れれる。

私はどうしようか悩むが

目の端に入った時計を見て声をかける。

「今日の放課後、待つてます。」

彼が頷くのを確認して自分の教室を手指す。

休憩時間は残りわずか。

15分では足りなかつたようだ。

それにも、一人称が”俺”になつてた。

あれが本来の喋り方なのか？

出合いました4（後書き）

細々と書き綴つていますが、見苦しい箇所がありましたらすみません。

出合いました5～過去からの～

まだ陽が落ちる時間ではないので、まだ室内は明るい。しかし、図書室の片隅は雰囲気がとても暗かった。

学業の時間から解放された私と王子が無言で向かい合っているからだ。

王子の顔は酷く沈んでいて、ヒビいものだが

伝えておかないとこれから話で差し支えが出るとみ事を申告する。

「最初に謝ります。私は相模さんの事は覚えていません。」

その言葉に反応するように彼は、寂しそうに応える。

「うん、そうだろうと思つてた。」

申告がすんなりと受理されたので、私は驚いたが今までの彼の言動を考えると

”覚えていない”ことは想定済みだったのだろう。

「えっと、話の続きをしてもらえますか。」

私が覚えていない記憶。

彼にはしっかりと残つていてる記憶。

気になつてしまふがないのだ。

長く息を吐き、彼は姿勢を正して喋り始める。

「・・・僕は、皆に嫌われていた。

この姿の所為もあるけど、大きな原因は僕の知能的成長が遅れていて喋らなかつたから。

目立つ存在なのに喋らない僕が気味悪かったんだと思つた。

幼稚園の年長組に上がつた頃から悪戯いたずらをされるようになつた。

小学校にあがると陰湿な悪戯になつていつた。「

私は話を聞くうちこ、顔が険しくなつていぐ。

小学校1年の悪戯にしてはレベルが高いからだ。

提出したノートが黒く塗りつぶされて返つたり、教室の清掃を全て任された後に汚されたり。

大人には気づかないように、うまく誤摩化せる範囲の出来事だ。彼は、放課になると更なる苛めを恐れて走つて帰宅していたそうだ。

頷きながら私は聞き入る。

「こつものよつに早く帰ろつと思つて、靴がない事に気づいた。」

靴がなければ、上履きで返るしかない。苛められていることがバレてしまう。靴をなくした事を両親に怒られるのも怖い。大人に報告されたと思われて更に虐められるのも怖い・・と独り言のように語る。

うん、子供ながらに悪循環に捕らわれていた彼に同情しそうだ。

「でも僕は学校の中を探し始めて、見つけたんだ。」

彼の遠くを見ていた瞳が私に向く。

「僕の靴を大事そうに抱えている女の子を」

『あの・・・それ、・・・』

大事そうに靴を抱える女の子に僕は怖々と声をかける。

靴を盗ったのが、この女の子かもしれないからだ。

彼女は僕が声をかけたのも気づいていないようで、振り返らない。しかし、返してもらわない事には帰宅出来ない僕は出来るだけ大きな声を出す。

『つそれは、僕の靴です。』

少しだけ責めるような言い方になってしまったが、今度はちゃんと声が届いたようで女の子が振り返る。

前髪を眉上で切りそろえ、肩下まで伸びた黒髪がゆれ、ほんのりと色づいた頬が彼女の肌が白いことを強調する。人形みたいに可愛い。

『人間？・・・これ、君のなの？』

少女の疑問に頷くと、落胆したように肩を落とす。

『むう～人間か。・・・はい、返すね。』

少し唇を尖らせてると、すぐに笑顔になり僕に靴を渡してくれた。

この感じからすると、盗ったのは彼女ではないようだ。

ほつとした反面

なぜ彼女が持っていたのか気になつたので質問してみると、不思議な答えが返ってきた。

『精靈さんを捕まえる呪文を唱えたら、靴が現れたの！』

興奮気味の彼女に圧倒されながら僕は話の整理をする。

図書室で”ひとり”魔術師^{じゆしき}をしていたら、呪文とともにドドン
つという音がした。

驚いた彼女は、音のしたガラス窓をみやる。

そして、今の呪文が成功したのかと思い喜々として向かつた先に”
現代の靴”を見つけたのだ。

あたりを見回しても誰も居ないので、きっと精霊さんの落とし物だ
！と思い大事に抱えて持つて帰ろうとしていた・・・ということだ。
彼女の仕業ではないのに、責めるような言い方をしてしまったこと
に罪悪感を抱く。

『勝手にもつて帰ろうとして、『ごめんなさい。』

『大きな声だして』『ごめんなさい。』

ふたり同時に謝罪してお辞儀したものだから頭がぶつかり、しゃが
み込む。

『『・・・・・ふっくく。』』

お互^{たが}いに視線があつた瞬間に笑^{わら}いだす。

どうやら彼女も、不可抗力ではあるが他人の物を”^{ひと}盗^ぬつてしまつた
”という罪悪感があつたようで緊張していたようだ。

笑い合つて、僕らは友だちになった。

そして、初めてのトモダチが出来た僕は放課後になると図書室に通
う。

図書室で読書をする彼女に付き合い、感想を聞き、共感する。

そんな毎日を送る中気になつたのは、彼女が常に^{つね}ひとりだといふこと
だ。

人より妄想癖が強い意外は、良い子なのに僕以外のトモダチと遊ん
だ。

でいるのを見た事がない。

もしかして、僕の所為で友だちが居なくなっているとかじゃないよ
ね？

・・・。

『みほちやん、僕と遊んで楽しい？他の友だちとも遊びたいんじ
やない？』

『さと君と一緒に楽しいよ。後ね、ずっと一緒に遊んではよー。』
あよとんとした表情で返答された。

彼女は何事も無かつたかのように読書に戻っている。

僕は今までに言われた事のない言葉に、顔が真っ赤になるのがわかつた。

それから数分もしないうちに、彼女は笑顔で顔を上げた。

『さと君。ケイヤクじよー。』

『ケイヤク？』

『うん、みほもさと君が”(さみ)寂しくない”ように約束事をす
るのー。』

ここにも載つてるよー。』

彼女が指した先には、お姫様と騎士がお互いに信頼しあっている。
想い合つていてる証として、お互いの指先に唇を落としていた。

僕は恥ずかしくなり後ずさる。

どうやら、心の絆を深める儀式のようだけど・・・。ひつと隣の
彼女を見る。

彼女は乗り気のようすで、すでに手を差し出していた。

『みほちやん、本当にさるの。』

恥ずかしさのあまり涙声になつてゐる僕に、彼女はキラキラ期待した瞳を向けてきたので、観念する。本に描かれている通りに動作する。

『『すべてを貴方へ』』

みほちゃんは僕の手を、僕はみほちゃんの手を取つて短い呪文を唱えてから手の甲へ唇をつける。

そして、彼女の提案で僕は”騎士様”となり彼女は”お姫様”という役割を得たのだ。

出来じました～過去からの～

私は遠い田をして相模さんの話を聞いている。

小学1年で精靈さんや魔術師ごっこをするのはまだ可愛げがある。しかし、手の甲とはい接吻するとは「アホすぎる。」

目の前にいる男性は端整な顔立ちの所謂美男子だ。
成長過程とはいえ、幼い頃の彼にチューを強要する私を想像する。
立派な痴女ではないか・・・恐ろしい。

心の中で身もだえている私に気づかない彼は話を続けている。

「僕にとつて初めて出来たトモダチ。お姫様は特別だつたんだ。
でも僕は君を、裏切つてしまつた。」

図書室の入り口についた時、内側から派手な音と女の子たちの笑い声が聞こえた。

何だらうと思い扉を音がしないように少しだけ開け、中の様子を窺うと僕の”お姫様”が複数の子と対峙しているのがわかつた。

「みほちゃんは、本ばかり呼んでるから猫背だね。おばあちゃんみたい。」

一本をよんでいる時も、ぶつぶつ呟いているし気持ち悪い。

一読書している間、顔もどんどん変わるし気色悪い。

「だから、今から可愛くしてあげる。」

親切心だと言わんばかりに、彼等は”お姫様”から本を奪い取り力

任せに破いていく。

止めてつと言ふ声が室内に響くが室内には彼等と彼女だけ。

一人で複数を相手に出来る訳が無く、本は最後まで破かれてしまつた。

僕の居る場所からは”お姫様”の顔はわからないが、彼女は手を握りしめている。

俺は、助けに入らなかつた。

自身に向けられる彼等の仕打ちが怖くて、動く事が出来なかつた。笑顔を見せる。

—イーメチエンも手伝つてあげる！

どこから持つてきたのか、手には鉄が握られている。

複数名が押さえつけようと”お姫様”に近づくが、彼女は慌てて身を翻す。

でも、取り囲むモノから出られず”お姫様”は押し倒される。

男子に前から馬乗りになられ、髪を強く引っ張られた彼女を周りの子達が嫌な笑顔で迎える。

じゃきつ！

肩下まであつた黒髪が一気にショートになつた瞬間、彼女は恐怖を露に叫び、暴れだす。

予想外に力が強かつたのか、彼女が暴れた反動で馬乗りになつていた彼が体勢を崩した。

彼の握っていた鉄の刃が彼女の肌を傷つけ、血が流れるのが見えた。

より一層
高い声が響き渡る。

その後、寂しそうな圖書室に一人

その後、寂しそうに図書室にしる”お姫様”を俺は遠くから見て、るだけだったが、両親の都合で引っ越しすることになった。

結局、俺は“お姫様”とは一度も会わずに転校した。

* * * * *

話を終え、言葉を切る王子は背後から負のオーラを出している。

幼い頃に出会った（らしい）相模さんと私は、どちら、お互いに虜められつ子だったようだ。

私自身には虐められた記憶はない。
（ことがら）

多分、見捨てたとか助けられなかつたとか思つてゐるのかな。

そこまで整理して私は口を開く。

「相模さんさがみがヘタレなのは、わかりました。」

「この見て、荒てて言葉を追加する。
思いのほか重い口調はなしでしまい。更に王子の顔色が暗くなつて

責めたい訳ではないといふ事をわかつてもらわないとね。

「多人数を相手に飛び出すのは脳みその無い人のする事です。

怪我をしてしまったのは私と襲いかかってきた子たちの責任です。決して、相模さんの所為じゃないんです。」

その場を叩撃したとしても、仲良く犠牲になる事は無い。

逃げて良かつたんだよ～つと思えるのは、当時の記憶が無いせいかも知れない。

しかし、太ももの傷を制服の上からなぞつていたら言つてはいけない本音が出てきてしまった。

「早く、助けを呼べば傷も付かなかつたのかな。」

言つた後に、はつとして顔を上げると彼の表情が瞬く間に歪んでいく。

そして、俯いてしまう。

つづりああ～～！

責めたい訳ではないのに、何気ない一言が彼を沈める要因になるのが嫌だ。

私は彼に向けて言葉を投げる。真っ直ぐに伝わるよう。

「相模さん、貴方が気にすることは何一つないんです。」

彼は顔を上げて、私を見ると表情を緩め席を離れて私の隣に移動する。

訳が分からずには彼の動向を見守ると隣で深々（ふかぶか）と頭を下げられてしまった。

「・・・ありがとう。俺の優しい”お姫様”」

小声で囁く声が嬉しそうだ。

でも、私は早く礼を崩してほしくて必死になつて隣に座るように促す。

彼は苦笑いで隣の席につく。

彼の瞳は明るさを取り戻したようで、綺麗な碧眼が私を見つめている。

直視されると恥ずかしいと考えて私は視線をそらす。
しばらく沈黙していると、彼が私に言った。

「じゃあ、改めてようじく、

今の台詞に私は嫌な予感がしてゆつくりと後ろに身体を引こうとする
と、素早く彼に一の腕を掴まれ捕獲されてしまった。
彼の思惑がわからずに表情を窺うと、目を細めて艶やかな笑みを浮かべている。

半強制的に王子とアモダチになつた状況を思い出す。
この顔、獲物を狙うネコ科の目だ。
でも、あの時は違ひ色氣がある。

・・・ちよつと、怖いんですけどー何これ！

ぐるぐると回る思考の中、王子の手が私の手を片方ずつ握りしめる。
そこで思つたのは、先ほどの話だ。

「相模さん、この手はなんでしょうか。」

私の質問しに、当たり前のように答える王子。

「契約に決まつてゐるでしょ。」

答えを聞いた私は反論しようとしたが、相模さんが遮るよつてに喋りだす。

「俺は、”お姫様”のことをずっと忘れられなかつたんですよ。

それなのに、”お姫様”と呼びかけたら避けられ怯えられ、

あげくの果てに俺の事を覚えていなかつた。

最初はそれでも良いと思つていたけど、油断していると危ない目に遭つてるし・・・」

ちょっと、溜息ためいきは失礼じやない

危ない目に遭つたのは、貴男あなたの所為なんですけど！
ぎつと睨むと、それを受け止めた彼は真顔まごで恐ろしい事を言つ。
「俺の”特別”を危ない目に遭わせた奴やつら全員に、
裏から手を回して退学に追い込むのは苦労したんだよ？」

聞き間違いかなあ。

そつであつてほしいなあ。

「君を守れる程に、体も頭も強くなつた。だから俺の”お姫様”に
もう一度なつて。」

うわっ！

この眼は本氣だ。危険だ。

私は彼に手を握られたまま考える。

この危険人物は今までの経験からして簡単には振り切れない。
じゃあ、どうするのが一番か・・・・制御を失つた人格者いいひとほど恐ろ
しい物はない。

だつたら私が制御するしかないっぽい。

いやだ。

もの凄く嫌だ。

でも、それ以外に手は無いような気がする。
(さすがに、退学は駄目でしょう。)

私は彼の手を握り返して誓いの言葉を唱える。
それに破顔した彼は同じく誓いの言葉を唱える。

後は、お互いの手に唇を落とす。
私が素早く手短に済ませると彼は不満を懨しきれない様で、眉間に皺が寄る。

そして、予想外の行動を取る。

「はわっ！」

彼の唇が離れたかと思うと、舐められた。
舐められたというか優しくゆつくりと愛おしむよつよつといやあ～～！

「相模さんの変態！」

「”お姫様”が素つ気ないからだよ。」

王子はしつとめた顔で唇を離し、手を解放する。
本気で危険人物だなこの男は・・・と考へて、私はこの男を制御しないといけない事を思い出す。
まずは、ここからだ。

「相模さん、”お姫様”ではなく前と同じ様に呼んでください。
お姫様”は禁止です！」

「じゃあ、『みほちゃん』？」

何の躊躇もなく彼の口から出てきたのは幼い頃の私の愛称。
私はすかさず訂正を入れる。

「ちがいます！鈴村です！」

出金いました～過去からの～（後書き）

いつの間にか読者登録して下さっている方が・・・！
本気で嬉しいです。
頑張ります～！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4803y/>

空色をかえて

2011年11月30日19時53分発行